# 論文要旨

論文題目：実質的真理性質の擁護

SD191012　須田悠基

目次

序章：真理をめぐる問いと対立
0.1. インフレ主義とデフレ主義
0.2. インフレ主義の基本テーゼ
0.3. デフレ主義
まとめ
第 I 部：形而上学
はじめに
第一章：真理の一元主義
1.1. 対応説
1.2. 整合説
1.3. プラグマティズム説
まとめ
第二章：真理の多元主義
2.1. 真理の多元主義の基本主張
2.2. 強い多元主義
2.3. 穏健な多元主義
まとめ
第三章：形而上学のなにが問題か
3.1. スコープ問題は多元主義を形而上学的に導かない
3.2. スコープ問題への一元主義的対処法
3.3. 正しい対処法特定の困難
3.4. インフレ主義の困難とデフレ主義の優位性
まとめ
小括
第 II 部：認識論
はじめに
第四章：真理の実質性と信念の規範
4.1. 信念の規範理由としての認識的理由
4.2. 真理の実質性と認識的理由の規範性を結びつける議論
4.3. 認識的理由の規範性を真理の実質性によって根拠づける必要性はない

まとめ
第五章：メタ認識論と真理
5.1. 認識的評価を説明する二つの立場：認識的記述主義と認識的表出主義
5.2. 認識的表出主義と認識的評価
5.3. 認識的評価の本性と実質的真理性質の構成的結びつき
5.4. 証拠構成主義と規範構成主義の導出
まとめ
第六章：機能主義的ミニマルインフレ主義と方法論的インフレ主義
6.1. 機能主義的ミニマルインフレ主義
6.2. 方法論的インフレ主義とその利点
まとめ
結論
参考文献

本稿が主題として扱うのは、〈真理〉という性質である。真理の本性の探究を行う〈真理論(truth theory)〉と呼ばれる分野の議論に定位し、真理性質とはどのような内実を持つ性質であるかを明確にすることが本稿の目的となる。

命題が例化する性質である真理は、言語哲学や認識論といった哲学の諸分野において重要なものと見做されており、そうした各分野の議論の不可欠な一部を成している。しかしながら、このような不可欠性が認められるにもかかわらず、現状、〈命題が真理性質を例化しているとはいかなることなのか〉という問いは十分に答えられているとは言えない。また、〈真理述語〉〈真理概念〉〈真理性質〉のレベルの差異を正確に踏まえた議論が十分になされておらず、区別の曖昧なまま真理に言及する議論が分析哲学の各領域でしばしば見られるという状態にある。

そこで、この混乱を整理・解消し、真理述語・概念とは区別される真理性質の本性について、その内実を明確にすることが本稿では試みられる。真理性質の本性の理解をめぐっては、〈インフレ主義〉と〈デフレ主義〉とそれぞれ呼ばれる二つの主要な立場が長らく対立している状態にある。そこで、本稿では、この対立に定位し、どちらの理解がより適切かを検討していくことを通じて、真理性質の内実を明確にしていくという手法を採る。結果として、デフレ主義は誤っており、インフレ主義のような仕方で真理性質は理解されなければならないということが示されることになる。

まず、序章で、デフレ主義の主張を過不足なく取り出し、インフレ主義といかなる点で対立するのかを整理した。その作業により、デフレ主義が核となる以下二つのコアテーゼから成る立場であることが明確となった。

コアテーゼ①：真理性質は、それがなにによって成り立つかについての構成理論を持たない。

コアテーゼ②：真理性質は、その存在によって世界内の事実を説明可能にしてくれるような本性を持たない。

逆に、インフレ主義はこの両テーゼを否定する立場である。具体的には、インフレ主義は、各命題がいかなる場合に真理性質を例化するのかに関して統一的な構成理論が存在すると主張し、コアテーゼ①に反対する。そして、同時に、真理性質なしでは説明できないような世界内の事実が存在すると主張し、コアテーゼ②にも反対する。そのため、真理性質の本性についてインフレ主義とデフレ主義のどちらの理解が正しいのかを確かめたければ、この二つのコアテーゼの正誤を検討すればよい。序章では、以上のような仕方でインフレ主義とデフレ主義の対立点を整理し、今後の議論の下準備を整えた。また、この章では、デフレ主義を論駁する上で採用可能なアプローチが二つあることも確認した。一つは、コアテーゼ①⇒②という順序で論駁を試みるアプローチ（構成理論アプローチ）で、もう一つは、コアテーゼ②⇒①という順序で論駁を試みるアプローチ（本性的説明役割アプローチ）である。インフレ主義の擁護論証を網羅的に確認するためには、両アプローチをそれぞれ検討する必要があるので、本稿では第Ⅰ部（第一章〜第三章）で構成理論アプ

ローチを、第II部（第四章〜第六章）で本性的説明役割アプローチをそれぞれ検討することとした。

まず、第一章では、命題が真理性質を例化するのはその命題が特定の一つの真理実現性質Fを持つおかげだ、という仕方で真理の構成理論を与える〈一元主義〉と呼ばれる立場の主要説三つ——対応説・整合説・プラグマティズム説——を確認・検討した。真理の構成理論として、対応説は〈命題が真理性質を例化するのは、それが事実と〈対応〉するという真理実現性質を持つ場合のみである〉、整合説は〈命題が真理性質を例化するのは、その命題が他の諸信念に対して〈整合〉という真理実現性質を持つ場合のみである〉、プラグマティズム説は〈命題pが真理性質を例化するのは、その命題が信じることを〈保証〉されているという真理実現性質を持つ場合のみである〉という理論をそれぞれ提示する。しかし、これら立場のいずれもが、自説が前提する真理の構成理論の範囲内では説明が困難な種類の命題が存在するという〈スコープ問題〉に対処することに困難を抱えるため、一元主義に基づいて真理の構成理論を与えコアテーゼ①を論駁する、という試みは見込みが薄いことが本章で確認された。

第二章では、スコープ問題は一元主義の真理の構成理論が誤りであることを裏付けているとし、種々の命題はその種類に応じた異なる真理実現性質によって多様な仕方で真にされるという真理の構成理論を提唱する〈真理の多元主義〉の見込みを検討した。この立場の最も見込みがある理論では、真理性質を機能主義的に理解する。それによれば、真理性質には誰もが同意するであろういくつかの特徴——プラティチュード——があり、このプラティチュードを満たす命題が真理性質を例化することになる。そして、このプラティチュードの満たされ方は命題の種類に応じて異なるとされる。たとえば、物理的事実に関する命題は事実との〈対応〉という真理実現性質を持つことによってプラティチュードが満たされ、規範的命題は他の信念との〈整合〉という真理実現性質を持つことによってプラティチュードが満たされる、といったように、多重実現可能な仕方で命題は真理性質を例化するとされる。しかし、この多元主義は、どの命題がどの真理実現性質によって真理性質を例化するのかを適切に選り分けるための道具立てを持ち合わせておらず、それゆえ、各命題に対して適切な真理実現性質がなにかを十全な仕方で決定できないことが本章で論証された。この論証を通じて、真理の構成理論を多元主義に基づいて与え、コアテーゼ①を論駁するという試みも、見込みの薄いものであると明らかにされた。

第三章では、まず、スコープ問題が、多元主義の主張に反して、正しい真理の構成理論が一元主義的なものではありえないと裏付けるものではないことを確認した。そのうえで、一元主義の下でスコープ問題に対処する方法はないかを再度詳細に検討した。その際、一元主義の立場のうち最も有力な理論である対応説の立場からこの問題への対処可能性を探った。対応説では、〈道徳命題〉の真理を自説の構成理論で説明できないというスコープ問題が生じるが、これに対して対応説が採用可能な対処法が四つある。具体的には、四つのメタ倫理学説——還元的対応説（還元主義的実在論）、非自然主義的実在論、

錯誤説、表出主義――のいずれかに依拠する仕方でスコープ問題に対処する方法である。しかし、本章での分析の結果、四つの対処法のいずれも、アドホックな仕方でスコープ問題を処理する余地はあるものの、その対処が形而上学的に正しい――真理の構成理論として正しい――ことを現状の経験的証拠からは示せないため、コアテーゼ①を論駁できないことが判明した。

以上の第Ⅰ部の議論を踏まえ、あらゆる命題に対して正しい真理の構成理論を与えるという〈構成理論アプローチ〉は現状見込みがないと結論された。そのため、もう一つのアプローチである〈本性的説明役割アプローチ〉を第Ⅱ部（第四章～第六章）で検討することとした。このアプローチでは、真理性質なしでは説明できない世界内の事実があると示すことで、コアテーゼ②を否定することが目指される。この真理性質なしでは説明できない世界内の事実が認識論の分野において存在するという議論があるため、本稿第Ⅱ部では、この分野において真理性質が果たす役割を検討することとした。

まず、第四章では、認識的理由が規範性を持つ規範理由として扱われる理由を、真理性質に訴えて説明し、コアテーゼ②を論駁するという議論の見込みを検討した。具体的には、これは以下のような議論である。認識論では、命題の真理を支持する理由――認識的理由――に従って信念を形成すべきであり、逆に、非認識的な理由に従って信念を抱くべきではないとしばしば主張される。なぜ認識的理由はこのように〈それに従って信念を抱くべき規範性〉を持っているのかという問いに対し、認識的理由は真理性質と結びついているがゆえにこのような規範性を獲得するのだと答え、コアテーゼ②を否定する議論がある。このような議論の正否を、第四章では検討した。認識的理由の規範性の源泉を真理性質に訴えることで説明するというこの議論戦略には、大きく二つの路線がある。一つは、真理性質を例化する信念は、その真理性質が持つ価値ゆえに目指されるべきものとなり、それゆえ、信念の真理を支持する認識的理由は規範性を持つのだ、と主張する〈目的論〉の戦略である。もう一つは、ある心的態度が〈信念〉と認められるのはそもそも真理性質の獲得を目指してその態度が形成される場合のみである、という構成的基準が信念という概念には備わっているとした上で、この〈信念が獲得を目指すような真理性質〉はデフレ主義では認められないような本性を持つのでなければならないと主張する〈認識的構成主義〉に依拠する戦略である。しかしながら、目的論には、我々の認識実践において真なる信念の獲得が目指されないような命題が多数存在する理由を説明できない、また、認識的理由は主体の目的の有無に依らずに規範理由となっているという反論を退けることができない、といった深刻な難点がある。そして、認識的構成主義は、それを擁護する二つの補助議論がいずれも失敗するため、上手くいかない。以上から、認識的理由が持つ規範性を真理性質の本性に訴えて説明するという議論は妥当でないことが明らかとなった。また、それゆえ、この議論によってコアテーゼ②を論駁する方針には見込みがないことが示された。

続く第五章では、第四章の議論のように認識的理由の〈規範性〉に着目するのではな

く、認識的理由という概念そのものに焦点化する形で、コアテーゼ②の論駁を行った。具体的には、これは、認識論という領域の営みの中で用いられている〈認識的理由〉という概念そのものが真理性質に依拠して同定されるものであり、かつ、この真理性質は、デフレ主義では認められないような本性を持つものと理解せざるを得ないのだと論証することでコアテーゼ②を論駁する、というものである。この論証のためには、まず、〈認識的理由〉という概念をいかなる内実のものとして理解すべきかを明らかにせねばならない。そして、認識的理由がいかなる概念なのかは信念の正当性や合理性を評価する〈認識的評価〉という営みをどのように理解するかで変わってくる。よって、本章では、最初に、認識的評価という営みの本性をどのように理解すべきか、というメタ認識論の議論をめぐって対立する〈認識的記述主義〉と〈認識的表出主義〉という二つの立場のいずれが正しいかを検討した。前者の認識的記述主義は、認識的評価という営みを、世界の側に実在する認識的事実や認識的理由を記述しようとする実践と理解する。それに対し、後者の認識的表出主義は、認識的事実や認識的理由というものの実在を認めず、認識的評価というのは我々がある信念を承認したり否認したりといった態度を示す実践なのだと理解する立場である。本章では、認識的事実・理由の実在を認めない認識的表出主義のような立場には大きな困難があるため、認識的評価という営みは、世界の側に実在する認識的事実・理由を記述しようとする営みだと言わねばならないことを示した。そして、この営みを担保する上では、認識的理由というものが存在論的に我々に依存しない形で〈証拠〉としての地位を持っていると言わねばならず、それには、コアテーゼ①②に反する仕方で真理性質というものを理解せねばならないことを論証した。第五章の以上の議論により、デフレ主義は論駁され、インフレ主義による真理性質の理解が正しいことが明らかにされた。このようにメタ認識論の議論を経由して認識論における真理性質の役割を明示する試みは例がなく、これは真理論の議論における本稿の独自の貢献だと言える。

最終章となる第六章では、第五章の論証とそこから導かれた結論に対する反論の可能性を精査した。結果として、考えられうる反論はどれも妥当ではなく、本稿で提示されたインフレ主義の擁護論証を脅かすものにはならないことが明らかにされた。また、真理性質とは、〈機能主義的ミニマルインフレ主義〉と〈方法論的インフレ主義〉という筆者が独自に提案する二つの立場に基づいて理解されるべきものであることが本章で同時に示された。この結果として、インフレ主義は従来考えられてきたような強い形而上学的コミットメントを伴う立場ではないこと、また、一元主義や多元主義といったこれまで提案されてきたインフレ主義の理論のいずれが正しいものであるかは今後の探究によって明らかにされるべきもので、現段階で議論する必要はないこと、これらが明らかとなった。